

原 著

児童の成績・能力についての自己評価と 父母の評定に関する日米比較

北 村 晴 朗** Harold W. Stevenson***
木 村 進** 加藤 忠久** 武田 悦夫**

CHILDREN'S SELF-EVALUATION OF THEIR ACHIEVEMENTS AND ABILITIES AND PARENTS' RATING OF THEIR CHILDREN AND THEMSELVSE—A COMPARISON OF AMERICAN AND JAPANESE

Seiro KITAMURA, Harold W. STEVENSON, Susumu KIMURA,
Tadahisa KATOH, Etsuo TAKEDA

Our previous studies suggest that in children's self-evaluation of their academic achievements and abilities, Americans are very confident while Japanese are rather modest. The same was true for mother's ratings of achievements and abilities of their children and of their own.

The purposes of this study were (1) to examine the validity of above observation in terms of our other data on mathematical achievements of children and their backgrounds (1985), and (2), if the observation was supported, to ascertain whether it is specific to our studies. For the purpose (1), we found the same differences between Americans and Japanese. Then to meet the purpose (2), we reviewed seven preceding studies relevant to this problem. The result indicated that our observation was not peculiar to our investigations but common to these studies. It also indicated that such American-Japanese differences reflected the cultural backgrounds about self-evaluation and self-assertion in these countries. The implication of this finding was also discussed.

(I) 問 題

われわれは、1980年来、著者の一人スティブンソンの
主宰する児童の読みと算数の学力に関する国際研究に従
事してきた。

その主なものは次の通りである。

- ① 1980年度 児童の読みに関する研究
 - ② 1982年度 幼児の読みに関する研究
 - ③ 1984年度 児童の読みに関する追跡研究
 - ④ 1985年度 児童の算数の成績に関する研究
- 研究対象は、アメリカ、台湾および日本の子どもであ
った。日本と台湾とでは、どの研究でもそれぞれ仙台と

* この研究は、アメリカ合衆国 NST Grant 8409272 (代表 H. W. Stevenson) による研究成果の一部である。日本側の研究は、その Subgrant (代表北村晴朗) によって行われた。

** 東北福祉大学 Tohoku Fukushi University.

*** ミシガン大学、東北福祉大学 (客員教授)
The University of Michigan, Tohoku Fukushi University

台北の子どもが対象とされた。アメリカでは①②③の研究の対象はミネアポリスの子どもであったが、④の研究ではそれに代ってシカゴの児童が対象とされた。なお、この研究では北京の児童も対象に加えられた。

①と④では小学校の1年生と5年生とが対象であり、②の対象は翌年小学校に入る5歳児であり、③の対象児は①の研究のときに1年生であったもので、この調査のときには5年の児童であった。

これらの研究の最初の目的は、アメリカにみられる読字困難 (reading disability) の児童が日本や台湾にはほとんどないという情報の当否を検討することであった。①の調査の結果、読字困難児は日本や台湾にもアメリカに劣らないほどの率でみられることが明らかにされた。ところが、読みとともに行われた算数の検査では、日本の児童の成績がきわめてすぐれ、台湾の子がそれにつき、アメリカの児童の成績がはなはだ低いという結果が得られた。そこで研究の焦点は、算数の成績にうつり、④の研究ではそれが主題となったのである^{6,7)}。

どの場合にも、研究は多方面からの接近法をとるものであったが、ここで検討するのは、児童と母親の面接から得られた情報である。

面接調査については、①の場合、被検児から抽出された480名の児童の母親、②の場合、被検児の約半数288名の母親、③の場合は174名の児童と母親が対象とされた。さらに、④の場合、被検児の約1/6、240名の児童と母親について面接調査が行われ、また父親についても、母親に対する面接におけると同じような項目について質問紙による調査が行われた。

面接の対象となった者は、それぞれ検査対象者の全体を代表するように抽出されたものである。①においては、最初に行った読みのテストの成績により各クラスごとに分けられた上位、中位および下位の3群から均等に抽出された児童の母親であった。③においては、①のときに1年生であった児童とその母親がふたたび対象となった。②と④とでは各クラスからランダムに抽出されたが、②の資料はここでは、とりあげられない。どの場合でも、一応、クラス担任の教師の意見をきいたので、とくに条件の悪い母親とその子を避けた事例もあったが、全体としては、その学級の状況を代表するものと思われる。

これらの面接調査でわれわれの目をひいたことの1つは、母親が自分の子の成績や態度について行う評価や児童が自分の成績等について行う評価のあり方が、三國間、とく日本とアメリカで著しく異なるということであった。つぎにいくつかの例をあげよう。

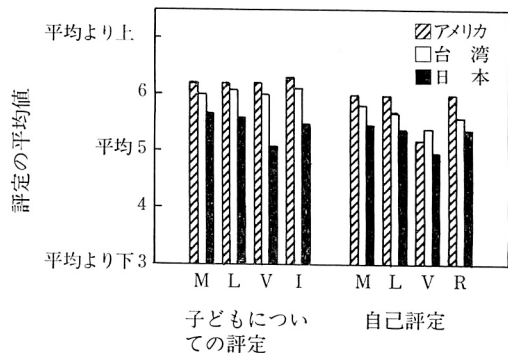


図1 母親のわが子と自分の知的能力の評価
(M記憶, L学習力, V識能力, I知能, R推理力)
 $F_s (2.1291-1360) = 6.66-53.88, p's < .01$

1) 母親のわが子と自分の認知的諸能力についての評価 (図1参照)

母親の評価が客観的であれば、評価は平均的な値を示すはずであるが、日本の母親の、言語的能力についての評価を除いては、すべて、平均をこえていた。そのなかでも、アメリカの母親は、わが子の能力をもっとも高く評価し、日本の母親は、それをもっとも低く評価した。この評価の仕方は、5年後の追跡研究の際の調査でも同様であった。

母親が自分自身の諸能力について下した評価も、その子について行った評価と余り変りはなかった。全般的にみて、日本の母親はもっとも控え目な評価をし、アメリカの母親は、もっとも自信にみちた応答をしたのである¹¹⁾。

2) 児童が自分の学業成績や能力についてくだった評価 (表1参照)

表1は1984年の追跡研究の結果であるが、アメリカの児童は読みの項目を除いてすべての項目でもっとも高い自己評価を与え、日本の児童はすべてにもっとも低い評価を与えた¹¹⁾。

このなか、とくに算数の能力についての自己評価もアメリカの児童ではもっとも高く、日本の児童ではもっとも低いものであったが、この評価は、面接と前後して行った算数のテストの成績と比較することによって、一層興味深いものとなったのである。

要するに、われわれの調査の結果は、アメリカの児童も母親も自分の成績や能力について、また母親はその子の成績等について、著しく高く楽観的な評価を与え、反対に日本の児童と母親は同じ対象についてひかえ目の評

表 1 自分の諸能力についての児童の評価

	アメリカ	台 湾	日 本	F	Scheffé Contrasts
頭 の 良 さ……………	4.9 (1.1)	4.2 (1.2)	4.0 (1.0)	21.10 [.001]	U < T & J [.001]
成 績……………	4.6 (1.1)	4.3 (1.3)	3.9 (1.1)	10.60 [.001]	U < J; T > J [.001] [.01]
算 数……………	5.0 (1.4)	4.3 (1.4)	4.2 (1.7)	11.24 [.001]	U > T & J [.001]
読 み……………	4.8 (1.2)	5.1 (1.1)	4.2 (1.4)	24.02 [.001]	U & T > J [.001]
潜 在 能 力……………	5.7 (1.5)	5.4 (1.6)	4.8 (1.3)	14.83 [.001]	U & T > J [.001]

注. () 内は標準偏差, [] 内は有意水準

質問と評定の仕方の例：算数の場合

「あなたのクラス他の子に比べてあなたの算数の成績はどうですか」

全然できない 1 <……………> 7 とてもよくできる

価を下したことを告げているのである。このことは、とりわけ算数について、アメリカの児童の成績が著しく低く、日本の児童の成績がもっとも高いという事実と照らせば、とくに重要な意義が認められる。しかし上述の研究では、算数のテストは副次的なものであり、主題は読みの問題で、しかもその成績には両国間にほとんど差がなく、部分的にはアメリカの児童がやや優れていたという事情があり、そこにみられた児童の自己評価や母親の児童評価における日米の差異をさらに確認し、補強する有力な資料が求められたのである。

そこで、もしこのような評価についての日米間の差が偶然的なものでないならば、算数に関する精細なテストにより日本の児童の成績とアメリカの児童の成績とを比較してその異同を検討した。④の面接でも同じような結果が得られるであろう。この報告ではその点を確かめ、さらにその原因や意義についても新しい情報を追加しようとするものである。

日米両国人の自己評価等の相違については、「考察」で示したように、以前から知られてはいたが、本稿は、両国児童の学業成績についての客観的資料がみられる場合における児童の自己評価や母親の児童評価を取扱う点に特色があると言えよう。

なおアメリカ人は、自己表現において、自己主張を美德とし、日本人は控え目で謙虚を好ましいと言われるが（「考察」参照）、その文化的背景が、この面接調査における日米の児童の自己評価と母親の児童評価にも反映するものと予想される、この点を確かめるのも本稿の目的の1つである。

(II) 方 法

児童に対する算数を中心とする検査については、別に報告したので⁷⁾面接等を主として説明する。

(1) まず児童に対する面接調査について述べる、質問事項は、算数に対する児童の態度や意識を明らかにすることに重点がおかれた。また、それと比較するために、国語等に対する態度などについても調査された。

面接調査は一連の算数のテストのほぼ中間で行われ、面接にはテスターがそのままこれにあたった。1年生には33項目の質問が行われ、5年生にはそのなかの31項目を含む45項目の質問が行われた。5年生については、120名中の45名の面接がすんだ後に、さらに10項目の質問が加えられたので、それを含む解答は75名によるものである。

1年生と5年生とに共通の質問を例示すれば次のようである（問の番号は5年生用のもの）。

問 1. あなたの好きな教科目は何ですか。

問 6. 算数はどのくらい好きですか。

問 7. 国語はどのくらい好きですか。

問27. クラスの他の子供にくらべてあなたの算数の成績はどうですか。

問28. クラスの他の子供にくらべてあなたの国語の成績はどうですか。

問32. あなたにとって算数はどのくらい難しいですか。（5段階評価）

問34. あなたは、どれくらい算数の勉強をしていますか。（5段階評価）

問36. あなたの先生はあなたの算数の成績をどれくら

い喜んでいきますか。(5段階評価)

問38. あなたのお父さんやお母さんは、あなたの算数の成績をどれくらい喜んでいきますか。(5段階評価)

5年生だけに対する質問項目のなかで、重要なものは次の問である。

問29. あなたが高校生になった時、あなたの算数の成績はどうなると思いますか。(5段階評価)

問30. 高校生になった時、あなたの国語の成績はどうなると思いますか。

なお一年生に対しては、この2問に対示する質問は、他の子に比べ、来年のあなたの算数(国語)の成績はどうなると思いますかとなる。

さらに、追加された5年生用の質問項目を例示する。(すべて5段階評価)

追加問 1. あなたは学校でよい成績をとるためには、生まれつきの頭の良はどれくらい大切だと思いますか。

追加問 2. よい成績をとるためには、努力はどのくらい大切だと思いますか。

追加問 5. 誰でも一生懸命勉強すれば算数の成績がよくなるとおもいますか。

追加問 7. 算数でよい成績をとるためには努力よりも生れつきの頭のよさの方が大切だと思いますか。

追加問 9. あなたのクラスではみんな同じくらい算数の能力をもっていると思いますか。

(2) 母親の面接調査

質問項目は、1980年度以降の経験をもとに選定され、広い範囲にわたるがここでは母親がわが子の算数の学習や成績についてもつ意見や態度に重点をおいて述べる。

面接者は定められたマニュアルによって説明と訓練を受けた女子学生で、面接は学校側の協力のもとに、個別に依頼して、母親の都合のよい日時に訪問して行われた。

質問内容は多方面にわたり、項目は細目では115程度であったが、大きく区分すれば次のような問題群になる。

- 1) 児童が小学校入学前の読みや計算について教えたかどうかに関するもの。
- 2) 現在、児童の勉強をみてやっているかどうか、またその時間はどのくらいかなど。
- 3) 児童の成績や学校の教育についての満足度に関するもの。
- 4) 児童の学習や教育についての親や学校の責任に関

するいくつかの意見に対する賛否と、その子が大学を卒業する見込について質問。

- 5) 他の児童にくらべて、わが子が勤勉さ、記憶力、知的能力(賢さ)および創造性の点で平均的か、それより上か下か、またこの4つの点のうち算数や国語の学習で最も重要なものを問う項目。
- 6) 他の児童とくらべて、わが子の勉強へのやる気の大小、国語と算数の成績の評定に関するもの。(5段階評価)
- 7) 母親自身の小学校時代の成績。当時の教育程度、教師の教え方などに関するもの。
- 8) わが子の算数や国語の成績の良否が、母親にとってどれほど重要かをきくもの。
- 9) わが子が算数や国語のテストでどの程度の点数をとれると思うか、またどの程度の点数をとったなら満足するかを問う項目。
- 10) 算数の学習でわが子に何か問題があるかどうか、悪い点数をとったらどうするかなどに関する問。
- 11) 算数の成績を左右するのは、本人の努力か、頭のよさか、誰でも算数や国語を学ぶ能力を同じくらいもつかなど。
- 12) 親は算数や国語の学習にどれほど影響を与えうるかなど。
- 13) 男の子と女の子のどちらがよくできるかについての質問。
- 14) 母親として、子どもに算数や国語を教える自信があるかどうかなど。
- 15) 児童の教育上の改善策についてのいくつかの提案についての賛否を問うもの。
- 16) 9つの計算式について解けそうかどうかについての質問(演算はさせない)。
- 17) 母親の経歴(学歴を含む)や仕事についての一連の質問。
- 18) 父親の経歴や仕事、また子どもに対する態度に関する質問。

その他、最近日本を含む8ヶ国の児童の学力の比較が行われたが、日本の子どもの算数の成績は何番ぐらいと思うかという質問、また5年生の母親については、1年生のときの成績にくらべて良くなっているかどうかに関する質問なども行われた。

面接時間は面接者が経験をつむに従って減少し、約1時間で終わるようになった。面接を予定した240名のうち実施できたのは233名、すなわち97%である。この比率は台湾では95%、シカゴでは81%であった。

(3) 父親に対する質問紙調査

これは母親との面接の際に、質問紙をわたし、後日、父親が答を記入して返送するように依頼した。回収率は仙台では92%、台北では81%、シカゴではわずかに38%であった。なおアメリカの場合、母親で夫をもっている者は67%にすぎなかった。

質問項目は母親の場合の4分の1程度であったが、内容は母親の場合と同様なものが多く、それに属するものは、上述の母親に対する質問内容の2) 3) 5) 6) 7) 8) 9) 11) 13) および14) 等であった。また父親がうけた数学の教育に関するもの、また子ども大学を卒業すると思うかどうかの質問もあった。

一般に面接調査に対する対応の仕方は、児童も母親も友好的であった。母親に対する面接者はしばしば茶菓の接待をうけ、質問がすんだ後にも、しばらく雑談して帰る場合が少なくなかった。児童の場合は、算数のテストの前半がすんだところで行われたこともあり、緊張のゆるんだ状況の面接となった。テスターがはじめてから、児童とのラポールに配慮したことは言うまでもない。

(III) 結 果

(1) 算数の成績について

児童が自分の成績をどのように評価したか、また、父母が子どもの成績をどのように評価したかをみる前に、児童の算数のテストの成績がどうであったかについて述べたい。というのは、日本とアメリカとの児童と父母の応答の違いのあり方は、児童の実際の成績と照らしあわせてみることで、一層明らかになるからである。

算数のテスト成績については、ごく概略だけは報告したが⁴⁾、ここでは個別検査の各下位検査の結果を3国間の有意性をそえて示すことにする。なお、本稿の主題は、日米の比較であるが、本来の研究が前に述べたように、台湾(台北)を含むものであり、台湾の資料とくらべることで、日米の違いがさらにきわ立つこともあるので、以下に示す資料も台湾を加えたものにする。

表2をみると、算数の9種の下位問題のうち、5年生の速さのテストと1年生の測定のテストを例外として、仙台の児童は、あらゆる問題群でもっともすぐれた成績をあげた。これに対して、シカゴの児童はどの問題でも1位を占めることがなかった。測定の問題で1年生の場合に有意差がなかったほかは、あらゆる問題で仙台の児童より劣り、台北との間では有意差のないものも幾つかはみられたが、全体として、台北の児童よりも劣る成績であった。

なお、単語の意味を答える問題では、1年生では、シカゴと台北が仙台よりすぐれ、5年生では仙台がシカゴ

よりよく、台北は中位を占めたが、仙台ともシカゴとも有意差はみられなかった。

(2) 児童の成績、能力等についての自己評価

これについては表3で主要の質問に対する答えを示した。まず算数と国語についての自己評価では、シカゴの児童が仙台の児童よりも有意に高い。算数や国語が好きだという点でもシカゴの児童は仙台の児童よりも上にあり、学校に入ったときの成績についてもシカゴの児童はきわめて楽観的であり、仙台の児童は有意に控え目である。

このような結果は、シカゴの児童の算数のテストの成績が仙台の児童にくらべて著しく低いという事実から考えると、幾分不可解という印象さえうけるのである。さらに、シカゴの児童は、その算数の成績について、教師も両親もともに、仙台の児童の場合よりも一層喜んでいっていると思っており、算数をそれほど難しくはないし、しかももっともよく勉強もしていると思っているのである。

このように、楽観的で、自信にみちたシカゴの児童とやや自信に欠け、控え目な仙台の児童の相違を例示するものとして、算数をどのくらい勉強しているかという問いに対する答えを図2で示しておこう。

(3) 児童の成績に対する母親の評価

児童が自分の成績や能力について下す自己評価において著しい日米差があることは、以上のところで明らかであるが、母親の子についての評価および自己評価はどうであろうか。表4をみると、まず児童の成績に対する母親の満足度は、成績全体についても、算数についてもシカゴの母親の満足度がきわめて高い。また他の児童と比較した場合、わが子の読みと算数の成績についての評定においてもシカゴの母親はもっとも高い評価を与えた。これらの評定で仙台と台北の母親の間には有意差がなかったが、算数のテストの成績がもっとも低かったシカゴの児童の母親がもっとも高く見積もったのは注目に値する。

つぎに、わが子の勤勉さ、記憶力、知的能力、創造性、大学進学の見込みについても、シカゴの母親は仙台の母親よりもはるかに高く評価した。さらに子どもに算数を教える自信についてもシカゴの母親は仙台の母親を凌ぐものであった。母親の小学校時代の成績については、両国間に有意差はみられなかった。

全体としてみれば、シカゴの母親は、わが子の成績や能力等をきわめて高く評価し、それに対して仙台の母親は控え目であったといえる。もっともわが子に対する母親の評価は一般に平均以上に高いところになっていて、仙台の母親の場合でも同様で、控え目とは言っても平均

表 2 算数の各下位検査の平均点の比較
(分散分析及びダンカン法による多重比較の結果)

	グラフ max=9 平均	視覚理解 max=13 平均	折り紙問題 max=10 平均	測定問題 max=13 平均
1 年	仙 台 6.1 ** 台 北 3.8 n. s. シカゴ 3.6 F (2,423)=57.45 p<.001	仙 台 9.4 ** 台 北 8.0 ** シカゴ 7.3 F (2,423)=51.0 p<.001	仙 台 6.4 ** 台 北 4.3 n. s. シカゴ 4.0 F (2,471)=44.4 p<.001	仙 台 6.1 台 北 5.7 シカゴ 5.6 F (2,471)=2.84 n. s.
5 年	仙 台 8.3 ** 台 北 7.0 n. s. シカゴ 6.9 F (2,472)=33.1 p<.001	仙 台 12.6 ** 台 北 11.1 ** シカゴ 10.6 F (2,472)=59.3 p<.001	仙 台 8.7 ** 台 北 7.6 ** シカゴ 7.0 F (2,471)=34.6 p<.001	仙 台 9.8 ** 台 北 9.2 ** シカゴ 8.7 F (2,471)=19.3 p<.001
1 年	速 さ max=9 平均	数の概念 max=31 平均	推 定 max=11 平均	操 作 max=24 平均
1 年	仙 台 11.0 ** シカゴ 8.8 n. s. 台 北 8.2 F (2,471)=10.2 p<.001 max=206	仙 台 19.9 ** シカゴ 15.0 n. s. 台 北 14.8 F (2,471)=55.49 p<.001 max=34	仙 台 4.9 ** シカゴ 3.1 n. s. 台 北 2.7 F (2,471)=56.0 p<.001 max=14	仙 台 11.3 ** 台 北 7.7 n. s. シカゴ 7.1 F (2,473)=61.6 p<.001 max=34
5 年	台 北 68.3 ** 仙 台 59.7 ** シカゴ 47.9 F (2,471)=45.1 p<.001	仙 台 29.0 ** 台 北 26.4 ** シカゴ 20.6 F (2,471)=153.1 p<.001	仙 台 9.3 ** 台 北 8.5 ** シカゴ 7.1 F (2,471)=56.1 p<.001	仙 台 18.6 n. s. 台 北 18.5 ** シカゴ 13.2 F (2,472)=105.8 p<.001
1 年	文章問題 max=27 平均			
1 年	仙 台 6.6 ** 台 北 5.2 ** シカゴ 3.7 F (2,820)=70.47 p<.001			
5 年	仙 台 18.5 ** 台 北 16.9 ** シカゴ 12.6 **			

(注) 別に注意深さの問題(一年生のみ)と数唱問題とがあるが、本来の算数の問題ではないので省略する。

表 3 児童への設問に対する評定値の比較
(分散分析及び Scheffe の方法による多重比較)

算数はどのくらい好き？
V3112

国語はどのくらい好き？
V3114

他の生徒と比べて算数の成績は？ V3133

他の生徒と比べて国語の成績は？ V3134

5
年

シカゴ	3.81	
**		
台北	3.43	**
n. s.		
仙台	3.28	

F (2,471)=11.49
p<.001

台北	4.05	
**		
シカゴ	3.75	**
**		
仙台	3.26	

F (2,472)=18.07
p<.001

シカゴ	3.62	
**		
仙台	3.23	**
n. s.		
台北	3.13	

F (2,471)=18.62
p<.001

シカゴ	3.62	
n. s.		
台北	3.40	**
n. s.		
仙台	3.18	

F (2,472)=11.52
p<.001

算数はどのくらい難しい？ V3138

算数はどのくらい勉強している？ V3140

先生は算数の成績をどれほど喜んでいると思う？ V3142

両親は算数の成績をどれほど喜んでいると思う？ V3144

5
年

シカゴ	3.43	
**		
仙台	3.12	**
n. s.		
台北	3.00	

F (2,472)=11.35
p<.001

シカゴ	4.20	
**		
台北	3.53	**
**		
仙台	2.98	

F (2,472)=93.18
p<.001

シカゴ	3.98	
**		
仙台	3.44	**
n. s.		
台北	3.25	

F (2,472)=28.17
p<.001

シカゴ	4.21	
**		
仙台	3.54	**
**		
台北	3.00	

F (2,468)=71.75
p<.001

高校生になった時、算数の成績はどの程度だと思う？ V3135

高校生になった時「国語の成績はどの程度だと思う？ V3136

5
年

シカゴ	3.71	
**		
仙台	3.35	**
**		
台北	2.91	

F (2,472)=31.90
p<.001

シカゴ	3.92	
**		
台北	3.33	**
n. s.		
仙台	3.33	

F (2,472)=29.57
p<.001

* 5段階評定の比較で、5に近づくほど肯定的、3で中立、1に近づくほど否定的評価である。

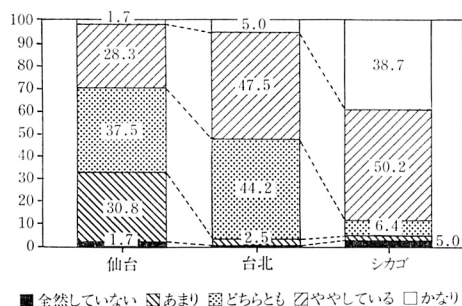


図 2 どのくらい算数を勉強しているか

の水準を越えているのである。

なお参考のため、算数の成績に対する母親の満足度をグラフにして示しておく(図3)。

(4) 児童の成績・能力等に対する父親の評定

表5は、児童の成績や能力についての父親の評定のすがたを示すものである。ここでもシカゴの父親の児童への信頼が仙台の父親よりもはるかに高く、楽観的であることが知られる。シカゴの父親はわが子の成績に、もっとも満足し、勤勉さ、記憶力、知的能力、また創造性についてももっとも高く評定した。大学進学の見込みについては、台北の父親よりは下廻る評定をしたが、それでも仙台の父親よりは楽観的であった。算数を教える自信も高かった。

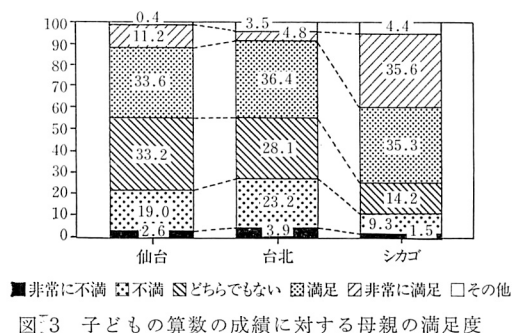
(5) 以上の結果をまとめると、シカゴの児童は自分の学業成績や能力を仙台の児童よりも有意に高く評価し、シカゴの父母は自分の子の成績や能力等を仙台の父母よりも著しく高く評定したといえる。このことは、われわれの以前の調査結果やそれに基づく予想を確かめたものである。しかも、とくに算数の成績が著しく劣っている

表 4 母親への設問に対する評定値の比較

(分散分析及びダンカン法による多重比較)

5 年	成績全般への満足度 V4041		算数の成績への満足度 V4042		大学進学に関する予想 V4047		わが子の勤勉さ V4049	
	シカゴ	3.83	シカゴ	3.80	台 北	4.55	シカゴ	3.92
		**		**		n. s.		n. s.
	台 北	3.17	仙 台	3.20	シカゴ	4.31	台 北	3.46
		n. s.		n. s.		**		*
	仙 台	3.15	台 北	3.03	仙 台	3.58	仙 台	3.43
	F (2,407)=22.45 p<.001		F (2,407)=22.80 p<.001		F (2,405)=39.07 p<.001		F (2,394)=6.90 p<.01	
5 年	わが子の記憶力 V4050		わが子の知的能力 V4051		わが子の創造性 V4052		算数を数える自信の有無 V4143 1=yes 2=no	
	シカゴ	3.92	シカゴ	4.02	シカゴ	3.86	シカゴ	1.31
		**		**		**		n. s.
	台 北	3.46	台 北	3.44	台 北	3.47	台 北	1.43
		n. s.		n. s.		n. s.		**
	仙 台	3.43	仙 台	3.36	仙 台	3.35	仙 台	1.63
	F (2,396)=15.36 p<.001		F (2,396)=32.72 p<.001		F (2,396)=14.43 p<.001		F (2,389)=14.65 p<.001	
	わが子の算数の成績の評定 V4067		わが子の読みの成績の評定 V4065					
	シカゴ	3.70	シカゴ	3.78				
		n. s.		n. s.				
	仙 台	3.50	台 北	3.53				
		n. s.		n. s.				
	台 北	3.29	仙 台	3.43				
	F (2,395)=8.07 p<.001		F (2,393)=6.82 p<.01					

* 特記してあるもの以外は、5段階評定の平均の比較で、5に近づくほど肯定的、3で中立、1に近づくほど否定的である。



シカゴの児童や父母の評価が、相対的に著しく優れた成績を示した仙台の児童や父母の評価よりもはるかに楽観的であり、明らかに過大であることが注目される。

つぎの問題は、このような、シカゴと仙台にみられた自己評価関係の差異は、われわれの研究にだけみられる

特殊なものか、または、アメリカ人と日本人について行われた他の諸研究にも共通にみられるものであるかということである。

(IV) 考 察

自己評価およびそれに準ずるわが子の評価において、アメリカ人はきわめて積極的あるいは楽観的であり、それにくらべると日本人は消極的あるいは控え目であるという傾向は、われわれの研究以外の多くの研究資料によっても確かめられ、あるいは示唆される。

(1) MMPI についての初期の研究で阿部は日本人がアメリカ人にくらべて精神衰弱性、精神分裂性およびくに抑鬱性で著しく高い得点をあげたことに注目した¹⁾。たとえば、A23「私はまわりの人びとと同じくらい有能でかしこい」では、日本の男は100%が否定したのに、アメリカ人は7%にとどまり、G12「私は大抵い

表 5 父親への設問に対する評定の比較
(分散分析及びダンカン法による多重比較)

5 年	成績全般への満足度 V6005	算数の成績への満足度 V6006	大学進学に関する予想 V6025	わが子の勤強さ V6008
	シカゴ 3.90 仙 台 3.38 台 北 3.30 F (2,296)=12.09 p<.001	シカゴ 3.71 仙 台 3.34 台 北 3.08 F (2,294)=10.56 p<.001	台 北 4.55 シカゴ 4.24 仙 台 3.83 F (2,295)=21.42 p<.001	シカゴ 3.36 台 北 3.13 仙 台 2.72 F (2,295)=17.39 p<.001
	** n. s.	** n. s.	* **	n. s. **
5 年	わが子の記憶力 V6009	わが子の知的能力 V6010	わが子創造性 V6011	算数を教える自信の有 無 V6032 1=yes 2=no
	シカゴ 3.82 台 北 3.42 仙 台 3.41 F (2,296)=8.51 p<.001	シカゴ 3.90 台 北 3.48 台 北 3.30 F (2,294)=18.36 p<.001	シカゴ 3.69 台 北 3.41 仙 台 3.38 F (2,295)=3.85 p<.05	シカゴ 1.16 仙 台 1.36 台 北 1.40 F (2,284)=7.18 p<.001
	** n. s.	** n. s.	** n. s.	* n. s.

* 特記した設問以外は、5段階評定の平均の比較で、5に近づくほど肯定的、3で中立、1に近づくほど否定的評価である

つでも幸福です」では、日本の女が100%否定したのに、アメリカ人は11%にすぎなかった。その他、I39「私はたしかに自信に欠けている」、F39「私の日常生活は興味あることでいっぱいです」、F39「私の記憶力は正常です」など、自己評価の意味をもつ項目では、アメリカ人は積極的な応答をし、日本人はきわめて消極的な応答に終始したのである。

これは日本版の渦準化の過程で得られた資料であるが、阿部は、抑鬱性尺度における「日米差のはげしいことは驚くばかりである」と述べた。阿部はさらに分離性尺度（精神分裂性尺度）における日米差を吟味し、そこでも、抑鬱性尺度ほどではないが、日本人の得点がアメリカ人の得点より多いことに注目した。結論として阿部は、アメリカ人の資料と比較すれば、現在の日本人の精神状態が充分に健全正常であると安心してよいかどうかについては懸念があるとし、そしてこのような抑鬱性を中心とする日本人の異常傾向が、日本人の本来の心性なのか、あるいは苛苛な大戦後の混乱期を脱していない1958、1959年当時の日本人の特異性なのかは、今後、明らかにされるべき大きな問題だと記したのである。

(2) Crumbaugh J. C. らによって開発された Purpose in Life Test (PIL) についてのアメリカの研究では、健常者と精神障害者を含めた全体の平均得点 102 (49-

51PR) を中心にして、健常者群の平均得点 112 (72-73 PR) 以上の者を、高い目的意識をもつ者、患者群の平均得点 92 (29-30PR) 以下の者を目的意識に欠ける者、そしてその中間の者をどちらにもつかない者とする基準が定められている¹⁹⁾。

ところが、佐藤が日本人に行った検査では、得点が全般にアメリカの被検者の得点よりも著しく低かったのである¹⁰⁾。具体的に述べれば、一般成人と大学生 447 名の平均点は 91.13 (SD17.03) であり、精神病患者 77 名のそれは 85.40 (SD19.43) であった。アメリカの基準では、日本の健常者でも得点の上で患者群と差がないことになる。健常者をさらに分けて高得点群 (144 名) と中得点群 (179 名) および低得点群 (124 名) に区分してみると、その平均得点はそれぞれ 110.36 (SD 7.67)、90.46 (SD 5.25) および 69.80 (SD 10.78) となり、高得点群でさえ、アメリカの健常群の平均点にわずかながら及ばず、中得点群もアメリカの患者群よりも低い得点であった。日本人は人生における目的意識が著しく低いことになる。

PIL のこうした結果が、本稿の主題とどのように関係するかを見るためには、このテストがどんなことを問うているのかという内容の吟味が必要である。佐藤が行った PIL の項目分析によると、20 項目のうち、問14、15、

表 6 成績の自己評価 (%)

	よ い			ふつう	よ く ない		
	とても	かなり	小 計		や や	とても	小 計
日 本	4.3	14.0	18.3	55.4	18.4	7.9	26.3
ア メ リ カ	22.2	46.7	68.9	26.1	4.2	0.8	5.0

表 7 成績と大学進学志望率 (%)

	よ い		ふつう	よくない (B)	B/A
	とても (A)	かなり			
ア メ リ カ	92.7	87.3	91.1	85.0	91.7
日 本	85.5	86.6	67.7	52.8	61.8

16は識別力が弱く、問 6, 7, 12, 18 も他の諸項目と異なる変動を示した。ところが、これらの項目の内容をみると、死に対する心の準備、人生に対する考え方、老後のことなどに関するもので、いずれも、自己評価とは関係が乏しいものであった。

これに対して、識別力の高かった他の 13 項目をみると、いずれも自己および自分の生き方についての自己評価にかかわるものであった。そのいくつかの例をあげれば、問 4 は「私という人間は」目的をもつ意味のある存在であるかどうかを聞くもの、問 5 は毎日が新鮮で変化に富んでいるかどうかに関するもの、問 13 は、「私は責任感のある人間であるかどうか」をきくもの、問 17 は「私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が」充分にあるかどうかにかかわるものであった。

したがって、PIL におけるアメリカ人の得点が、日本人の得点よりも著しく高いということは、主としてアメリカ人の自己評価が日本人の自己評価にくらべると顕著に高いこと、逆に言えば、日本人の自己評価がアメリカ人に比較してはなほ低いということの意味するものである。この資料もわれわれの結果と同様な意味をもつものと思われる。

(3) 上に述べたテストの結果はすべてわれわれの調査に見られた自己評価に関する日米間の差異が偶然的なものでないことを示したが、その方法と対象者という点ではわれわれの調査とは異なるものであった。調査が質問紙法という点は別として、内容の上で類似していたのは、深谷らの調査である³⁾。

深谷らは、小学 5 年生を対象として、1989 年から 1990 年にかけて、日本、アメリカ、ニュージーランド、タイの児童の生活のあり方について多くの事項について、質問紙による調査をした。そのなかには児童の自己評価に

関するものが幾つか含まれているので、その点を中心に、日米の資料について検討する。なお日本では、東京、札幌、福岡の子ども 1,282 人、アメリカでは、ロスアンジェルス郊外の準高級住宅地の子ども 375 人が対象とされた。

まず成績についての自己評価（5 段階評価）をみると、上の表 6 のようであった。

この表で明らかなように、日本の子どもの自己評価は低く、これにくらべてアメリカの子どもの自己評価は著しく高い。被検児を成績によって上・中・下の 3 群に分ければ、その構成比は、日本とアメリカでほぼ同じと想定されるが、この資料から考えれば、日本の子どもの自己評価はやや低くすぎ、アメリカの子どものそれは著しく高いと言ってよい。

自分の成績についての楽観的な自己評価がアメリカの児童に顕著であることは、将来、大学まで進むつもりであると答えた者の比率がアメリカの場合、日本の場合よりもはるかに高いことからもうかがわれる。上の表 7 はこのことを明らかにする。アメリカでは、自分の成績が「普通」と思う者でも「よい」と思う者に劣らぬ比率で大学を志望し、「よくない」と思う者も日本にくらべてはるかに高い割合で志望した。日本の場合は、「よい」と思う者、「普通」と考える者、「よくない」とみる者はその順に大学に志望するものの率が少なくなっている。

アメリカの子の楽観的傾向は、学科の好悪の調査にもうかがわれる。日本の子どもは、国語の好きなもの 62.1 %、数学の好きな者 59.3 % なのに対して、アメリカの子どもは国語の好きなもの 83.8 %、算数の好きなもの 74.3 % に達し、そのうち国語がとても好きなもの、算数がとても好きなものは、それぞれ 42.8 %、48.0 % をしめたのである。

このような自己評価に関する日米の児童の間の著しい違いについて、深谷らは、控え目な自己評価をする文化と過大に評価する文化として説明できるか、それとも学習競争の中で、日本の子どもたちが自分に自信を失っている証拠なのかの議論が必要であろうと述べた。しかし結局のところ、深谷らは、日本の場合、教育過熱状況が進んだために、成績の良し悪しに神経質になり、成績がよくない自分にこだわり、自信を失いがちになったのではあるまいかと考えた。将来の見通しについても、アメリカの子どもは今は「成績が悪くとも、将来については成績のよい子と同じような明るい見通しを持っているのに対し、」日本の子の場合は、「成績が不振ぎみになると努力不足を感じて、自己像が縮小していく」とみたのである。

この意見がどこまで妥当であるかについてはさらに吟味する必要があるが、そのためには母親の応答の仕方の検討が役立つであろう。

(4) 東、柏木およびヘスは、1973年から1975年にかけて、日米の幼児とその母親を対象に、母親の態度行動をその子どもの知的発達について精細な比較研究を行った。そのなかで、母親の子どもへの発達期待に関する面接調査の結果はきわめて示唆的である²⁾。

東京と札幌の母親58人、サンフランシスコの母親66人の結果が分析の対象となった。総調査項目(41項目)のうちで、日米に共通の就学前後の発達課題として想定された7領域に配分されたのは37項目であった。そのうち「学校関係スキル」には差がなく、「礼儀」にも大差はなかったが、日本の母親は、「情緒的成熟(自制)」、「従順」、「自立」について、米国の母親よりも早期の発達期待をもち、米国の母親は「言語による自己主張」と「社会的スキル」の発達を日本の母親よりも早期に期待したのである。アメリカの母親の場合、「社会的スキル」に属する3項目のうち、⑫「友だちを説得して、自分の考え、したいことをとすすることができる」と⑩「友だちと遊ぶとき、リーダーシップがとれる」の項目がとくに重視され、「言語による自己主張」では、⑦「納得がいけない場合は説明を求める」、⑭「意見や希望を聞かれたらはっきり述べる」、⑮「自分の考えを他の人たちにちゃんと主張できる」、および⑩「自分の考えやその理由を他の人にわかるように説明できる」という項目が重視された。それに対し、日本の母親では、とくに「情緒的成熟」のうち、④「やたらに泣かない」、⑭「欲求不満になったときでも泣かずに我慢できる」、⑮「いつまでも怒っていないで、自分の機嫌をなおす」などがとくに重視され、全体とに自己抑制の態度がつよく期待されている。

東らは、「この日米の母親の発達期待の特質は、それぞれの文化において高く価値づけられ、求められている特性を反映するものであろう」と考えている。この見解は、われわれが目にした日米の自己評価や母親の子についての評価の著しい差異の解釈においても、十分に参考になるものとおもわれる。つまり、自己主張を望むアメリカの文化パターンと、自己抑制を期待する日本の文化パターンが、日米の児童の自己評価や母親のその子に対する評価における著しい差異を生じる大きな背景として働いているのではないかと考えられるのである。

(5) この想定は、日米の国語の教科書の内容を比較検討した今井のユニークな調査によって支持される³⁾。著者は通産省から派遣されてワシントンD.C.に3年間勤務し、その間、小学校に入った2人の子どもの教科書にみられる米国人の考え方・価値観に驚きを感じ、あらためて日米の国語教科書にとりあげられた題材につき比較検討を試みたのである。

アメリカの教科書はThe Riverside Publishing社の1年生から6年生用で、日本ののは、日本書籍社と東京書籍社との1年から6年生用の二種の教科書とともに1988年版。前者の全題材211篇と後者の全題材209篇との内容が吟味された。その結果、著者は、アメリカの教科書には「愉快で、外向きで、個性的で、強い個人」のイメージが強調され、日本の教科書には「深刻で、内向きで、求道的でやさしい一員」という姿があらわれているとした。もっと端的には、「強い個人」と「やさしい一員」という対比である。

具体的に言えば、「自己主張」「自立心」「独立心」に関するテーマはアメリカではそれぞれ7、計21もとらげられているのに、日本にはない。「自我の確立」「強い意志」というテーマの米日の比はそれぞれ7:2、15:1であった。さらに「チャレンジ精神」と「興味関心」のテーマの米日の比率は14:4と8:0、「個性の尊重」と「長所の発見、尊重」に関する米日の比はそれぞれ8:2、7:1であり、その他「fair, unfair」のテーマでは11:0であった。これに対してアメリカよりも日本で多くとりあげられたテーマは「親子関係」「やさしさ、相手の気持になる」および「自己犠牲の精神」で、米日の比率はそれぞれ14:37、2:16および0:8であった。

国語の教科書は今井が述べたように、ものの考え方や価値観をとくに教えるものではないが、それだけかえって、その題材にあらわれている考え方や価値観は、その社会でごくあたり前のこととして共通に認められているものといえる。

今井は、アメリカ人と日本人の価値観の違いを、「強い

個人」と「やさしい一員」との対比でまとめたが、「強い個人」の端的なあらわれは、「自己主張」にみられる。しっかりした自己主張の反対概念は「恥ずかしがりや」(sky)で、アメリカでは前者が美德であるのに対し、後者は矯正を必要とする好ましくない特性とされるのである。今井は、日本人がアメリカ人とは付き合い、交渉するときには、相手が「強い個人」として育てられたのに対し、自分らは「やさしい一員」「相手の気持を考える」ように教えられてきたということを忘れてはならぬと強調している。

この見方からすれば、われわれの調査にあらわれた自己評価や自分の子どもについての評価における著しい差異は、偶然的なものでも日本側の過熱した教育事情によるものではなく、両国の社会的風土の反映であるという推定がさらに強められるのである。

(6) このような推論を、日本の児童についての研究によって支持するものは、吉田・古城および加来¹²⁾の業績である。彼らは、小学校の1年生、2年生および5年生を対象としてその自己呈示(Self-representation)の発達の経過を実験的に研究し、その結果を次のようにまとめた。

1) 2年生でも、謙遜して自己卑下的に自己を呈示する人は、自己高揚的な提示をする人よりも人格的に高い評価をうけるという認知をもち、クラスメートに対し自己謙下的な謙遜した自己呈示を行うことができる。

2) 3年生では、同じような認知のもとに、クラスメートだけでなく、新しい仲間にも自己卑下的な自己呈示が行われた。

3) 5年生の場合、女子では、未知の人には、自己の否定的な諸点を呈示しないという意味で多少自己高揚的な呈示をするか、男子ではやはり自己卑下的であった。

総体的には、5年の女兒はやや異なるが、日本の学校の児童は、自己を卑下的に呈示することが周囲の人々から高く評価されると思い、そのように自分を呈示する傾向があると言える。この知見は、日本の児童の控え目な自己評価が、周囲の人によって高く評価されるという社会的な認知の反映であることを示唆するであろう。

(7) アメリカの児童についての同様な研究を目にすることはできなかったが、アメリカでは児童の積極的な自己主張が肯定され、奨励されることを示す1つの資料を紹介したい¹³⁾。

Mehelson らが開発したものに子どもの社会的スキルを査定するための子ども用主張行動尺度がある。子どもに接している人が、与えられた27の場面でその子が行う言語的反応を、5つの選択肢から選ぶものである。選択

肢は、攻撃的反応が2つ(強いものと弱いもの)、積極的反応が2つ(強いものと弱いもの)、それに自己主張的反応が1つである。攻撃的でも消極的でもない自己主張がもっとも望ましい反応であるということがその前提となる考え方である。

27項目のうち直接に自己評価にかかわるのは①、③、④、⑩の4項目であるが、ここでは、そのなかの2項目について例示したい。

④子どもが持参することになっていたものを忘れ、「バカだな君は」と言われた場合の反応のなかで、「誰だって完全無欠じゃないよ。何か忘れたからというだけで、ぼくがバカだってことにはならないよ」というのが自己主張の反応。やや消極的な答は「何も言わないで無視すること」、きわめて消極的な答は「うんそうだよ、時々ぼくは本当にドジをするんだ」という反応であるとみなされる。

⑩子どもがその行為について誰かにとても立派だとほめられたときの反応のなかでこのましい自己主張的な答は「ありがとう」ということであり、何も言わないのはやや消極的な反応、「いいえ、それほどのことではありません」と言うのはきわめて消極的な反応とみなされる。

このような消極的な反応は、日本では謙虚または自己卑下とみなされ、どちらかと言えば好ましい反応と思われるが、アメリカでは、攻撃的な反応と同じように好ましくなく、訓練によって自己主張ができるよう指導されるべき態度なのである。たとえば、⑩の場合、「いいえ、それほどのことでは有りません」と答えるのは、「もちろんですとも、だって私がいちばんうまいんだもん」と言う攻撃的な態度と同じ程度で好ましくないとれるのである。

(8) 以上に述べた七種の資料をあわせて考えれば、アメリカでは成人も子どもも積極的に自己主張をし、成績や能力についても自己を高く評価するのが普通であり、日本人は、むしろ自己を控え目に謙遜して評価する傾向が一般的であるとみてよいであろう、そして、とくに東らの研究や今井の調査、吉田らの研究、アメリカの主張行動尺度などを考慮すれば、ここで概観した日米両国民の態度の相違は、調査が行われた時代や地域の文化社会の特殊性にかかわりなく、両国の文化的差異にもとづくものと考えられるのである。

日米の児童の自己評価の差異については、アメリカの児童の楽観的、自己肯定的な態度を積極的に評価する意見(深谷ら)もあるが、スーヴンソンらは、児童の成績等についてのアメリカの母親の楽観的な態度を日本の母親よりも非現実であり、子どもの成績に対して低い標準を

立てるように導くものとみる。この見解はアメリカ人の自己評価や自己主張についての積極的態度が、児童の成績の不振にかかわりのあることを示唆するのである¹¹⁾。

(V) 要約と結論

児童の読みに関する国際研究において、児童の成績についての自己評価と母親の児童評価では、日本側は控え目なのにアメリカ側はきわめて楽観的であることがわかった。本稿では、アメリカの児童の成績が、日本の児童よりも著しく低い成績を示した算数の検査の際に、併せて行われた面接検査でも同様の差異があることを確かめた。

われわれはさらに、成績や能力についての児童や両親の自己評価と両親の子に対する評定では、アメリカ人は著しく積極的であり日本人はやや消極的であるという結果は、米日両国に於ける自己評価や自己主張に関する社会文化的な差異の反映であることを、他の諸文献の検討によって明らかにした。

このような態度の差が、教育に及ぼす影響については、更に吟味を必要とするが、われわれの研究に関しては、アメリカ人の過度の楽観的傾向が、児童の成績を不振に導く方向にかかわりをもつことが示唆された。

この文化的差異は両国についての各種の調査の結果の理解や解釈においても十分に考慮に入れる必要があり、広くは日米間の各種の協議や討議においても考慮することが望ましいと考えられるのである。

なお、多くの点でアメリカと日本の中間的な応答を示した台北の資料についてはここでは立ち入らなかった。

終わりに著者中、加藤忠久は日本側の検査・調査に多大な尽力をしたが、成果の発表を見ることなしに長逝した。

なお、本研究の一部は、日本応用心理学会第57回大会に於て発表された。

文 献

- 1) 阿部満洲：MMPI を通して 観た 日米人パーソナリティの比較。大脇義一教授在職35年記念心

- 理学論文集、大脇教授在職35年記念祝賀会刊(東北大学文学部)、60-73, 1959.
- 2) 東洋、柏木恵子、R. D. ヘス：母親の態度・行動と子供の知的発達 ―日米比較研究―。東京大学出版会、とくに 84-88, 187-190, 302, 1981.
- 3) 深谷昌志、深谷和子：第2回国際比較調査報告書「都市環境の中の子どもたち」。福武書店教育研究所、とくに 33-35, 45-49, 54, 1990.
- 4) 今井康夫：アメリカ人と日本人 教科書が語る「強い個人」と「やさしい一員」。創流出版、とくに 85-148, 282-288, 1990.
- 5) 木村 進、H. W. Stevenson：児童の読みの能力に関する国際研究。児童心理学の進歩、1985年版、金子書房、305-335, 1989.
- 6) 木村 進、H. W. スティーブンソン、北村晴朗、武田悦夫：児童の算数の成績に関する国際研究(第1報告) ―結果(その1)―。東北福祉大学紀要、11, 183-190, 1990.
- 7) 北村晴朗、H. W. スティーブンソン、木村進、加藤忠久：児童の算数の成績に関する国際研究(第1報告) (1)目的・方法および検査・調査内容。東北福祉大学紀要、11, 168-181, 1990.
- 8) 北村晴朗、木村 進、武田悦夫：児童の成績についての自己評価と母親の評価に関する日米比較。日本応用心理学会第57回大会発表論文集、86, 1990.
- 9) Mehelson L., Sugal D. P., Wood, R. P., Kazdin A. E. (高山 巖、佐藤正二、佐藤容子、岡田順一 訳)：子供の対人行動 社会的セキル訓練の実際。岩崎学術出版社、10-14, 40-49, 1987.
- 10) 佐藤文子：実存心理検査 PIL の検討 I ―態度スケールを中心に―。アルテス・リベラレス(岩手大学人文社会学部紀要)、35, 125-140, 1986.
- 11) Harold W. Stevenson, Shin-ying Lee. In collaboration with Chuansheng Chen, James W. Stigler, Chen-Ching Hsu, Seiro Kitamura: Contexts of Achievement. Monographs of the Society for Research in Child Development. Serial No. 221, Vol. 53, Nos. 1-2, 1990.
- 12) 吉田寿夫、古城和敬、加来秀俊：児童の自己呈示の発達に関する研究。教育心理学研究、30, 120-127, 1982.